

高澤良一句集

『さざなみやっこ』 私見 本宮鼎三

この句集『さざなみやっこ』の著者、高澤良一氏と、どこかで出合っているのかも知れないが、記憶力の弱い私は、その容貌など、全く思いつかないのである。しかし、袖を仮にふれ合なかつたとしても、句集を見させていただくということとは、俳人同士、「他生の縁」ということになるろう。

しかも私とは、同世代の昭和一桁生れ。この句集を味読して、いちいち肯くことばかり、また身につまされることが多いので、この盲筆を敢えて執らせていただ

くこととした。この句集の分類になら
い、四季別に作品を挙げることにする。

「春」

梅を見て廻る歩幅となりゐたり
紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ
花さんしゆゆ日差しに斑のありにけり
花山菜莢いり玉子めき夕日中
まんさくに昼の風向きかはりけり
みつまたの夕づく蒼思慮深げ
にはとこの出臍のごとき芽の並び
菜の花のきちがひじみしひかりあぶ
一泊が二泊となりぬ花菜村
絹莢のさして頼りにならぬ蔓
兎波マーガレットに駈け寄りぬ
風除け篠ストツクの香を封じけり
おてだまを抛りあぐごと白木蓮

大如雨露ぐうるりぐるりチューリップ
滴れりみみずのやうな鹿尾菜の茎
さくらさう二つ返事で咲きにけり

この句集をひもとして先ず目をみはったのは、この作家が植物に詳しいということである。俳句は、「いいとめる」「みとめる」ということが大切だが、高沢良一氏は永年、「もの」を見る眼を鍛え、その鍛え抜いた眼で、もろもろの植物を観察し、それを観照、つまり自分の限光で照らして、詩に昇華させていると私は感じている。

たとえば

にはとこの出臍のごとき芽の並び良一

を例に挙げれば、この句から、ふと

甘草の芽のとびとびのひとならば 素十

を思いおこすのは私だけでないだろう。
それは高野素十の句の姿に似ているから
であり、ややもすると、姿が乱れがちな
現代俳句の中にあつて、林火鉄之介とい
う系譜を曳くこの作家が、その教えに従
い、正しい句の風格を守ろうとする、そ
のあらわれであると私は受けとってい
る。「にはとこ」の「芽」を「出臍」と
みとめたのは良一独自の眼である。「み
とめる」は「認める」であるが、この漢
字の構成を見ると「言を忍ぶ」、いえば、
いい過ぎないことであるともいえよう。
目で認め、ほど良いところを、言葉にす
ることであろう。「出臍」は、ほどよいと
ころだ。「雨滴とろり」「兔波」「おてだま」

なども快い、いいとめ方である。まだ「春」で認めたい良一作品があるが次へ、筆を進めよう。

「夏」

金網を這ひずりまはる時計草 良一

野あやめの妹分の著莪咲けり

濃あぢさゐ男色の粹尽しけり

十葉の森の何処より手をつけむ

苗はこぶ南安曇野曇りかな

若楓煽られしどろもどろかな

梅もぎの擦り傷此処とことここ

教会の三人掛の梅雨木椅子

でで虫も其角の墓も傘の内

つまみ上げ大海牛の段袋

菱形となりて大瑠璃駆くるそら

あめんぼう脚のさうじにかけりけり

ががんばのせうことなしに玻璃せせる
もう我慢できぬぶんぶん締出せり
木栗の音を聴きゐる華奢な蔭

大野林火全集

橘のかをるが如く上木す
こころもち幹を捺りて夏櫛
御旅所に団扇と扇子語らひつ
長かりし一日ビールの黄昏色
くりくりの空があるなり吾亦紅
利かん気な飛び方をせる蛸一つ
かはほりに油ツ紙のやうな空

「論より実作」という見方から、つい面白い句を挙げてしまうと、かくも多くなるのである。もちろん「春」にも私が挙げなかった句で、いいのがある。「夏」作品も同じことがいえるということとは、お断りしておこう。とにかく読んでいて、思

わず「微笑」を誘う句が、あまたある。私の師、秋元不死男は「俳句は微笑の文学」といつていた。

高沢良一氏も「アクアミュージアム」で見た「熱帯魚」を見て「悠々」「人なつっこさ」を感じ、「サザナミヤツコ」などという、その名に「庶民性」「俳諧性」そして、自身との共通点を見出だして、微笑し、ここから俳句の活力を汲み取っているのである。

この高沢式俳諧には、先人がいる。それは小林一茶である。

寝ころんで蝶泊まらせる外湯哉 一茶

瘦蛙まけるな一茶是二有

我と来て遊べや親のない雀

これは私がいうまでもなく、氏はよく「

存知の筈、しかし高沢氏の方が動植物とも
もにその素材が広いし、また観照の視点
も現代的で、境涯性を内面に沈潜させ、
表面に持ち出さないので、読者に快感を
与える。

だが、俳人の精神という点では一茶と一
致するものがあるのは見逃せない。

いえば、俳句の上では人は花、鳥、虫と
同等であるということ…。「松のことは
松に習へ」芭蕉語録のとおり。「松」を師
としたり、友とする…。或は「蛙」を、「雀」
を、「蝶」を、「熱帯魚」を友として暮ら
すことのできるのは、俳人に天から授け
られたものというのは過言だろうか
…。私は氏の俳句にそれを感じている
のである。

「秋」

竜淵に潜む面持ちして診られ 良一

跳ぶ前をおんぶばったのゆうらゆる

とび出して土師器色なる墳の虫

稲雀舞ひ降るてんでんばらばらに

屈服の仕方まちまち破蓮

迎へ火のたきつけ紙をひねりけり

おがら火の一揺らぎして直なる炎

背合せに吊らる軸物お風入れ

松手入れすこし空き過ぎたかとおもふ

とにかくこの自在な表現は、二十年ぐらい作句に打ち込んで鍛えないと、湧き出てこないはずである。

要するに俳句のいい、わるいは、どこで決めるか…。一言では誰も答えられないと思うが、その一つには「季語」十七字

の中で、十分、活かしきっているか、どうかということがある。

また、その二つには「もの」をよく見るというが、一步踏み込んで対象をよく見ているかというのと、人の目の気づかないところ、つまり意表を衝くことができるか　というような要素があると思う。

意表を衝く表現、それと諧謔が適当に入りまじつていて、いい意味の「遊び」が感ぜられるとともに、季語を無理のない形で、軽妙に、らくらくと活用しているのが、良一俳句の特徴の一つであるといえよう。

「文」

水仙をぎうと鳴らして活けにけり

柀の人目にふれぬ零れ方

新薬の効き目追ひ追ひ枇杷の花

冬ざくら花の漂着せる如く

こんもりと妻の蒲団の山かたち

心電図師走の波形出でをらむ

籠りきり日向ぼつこのやうな日々

炬燵火に脛を焙りて「安愚楽鍋」

手前より杭・葭・鴨の睡る水

青畝迎へ俳人協会黄泉路支部

本の塵本に舞ひ降る煤払

こりこりと何を剥きゐる小晦日

鉢物に土を足しやる小晦日

年の瀬に打ち上げられてゐるごとし

おしくらまんぢゅう服台無しにしてをりぬ

青天に月は大きな氷玉

平橋に続き反橋雪積める

これらの作品、おしなべて飄逸、滑稽、軽妙であり、また閃めき、直観力、動きを即刻、いいとめてしまふ、その素早い判断力、そういつた作者の五官の磨きに私は、感心させられるのである。

それは芭蕉の「物のみへたる光、いまだ心にきへざる中にいひとむべし」に適用句法であり迅速なる、このいいとめ方は、この作者の独自のものであるといえる。

たとえば

冬ざくら花の漂着せる如く 良一

「冬ざくら」を見た瞬間、「漂着」という語が泉のように湧き出でてくるのは、並大抵の作句修業では、こういうわけにはいかないだろう。

この句集は、この作者不断の努力が結実

したものである。

まとまらない句集評となってしまうが
師走の一夜を棒にして書いたこの拙文、
よろしくお汲みとりいただきたい。

(平成五年十二月二十二日記)